

武蔵野

ヒストリー

武蔵野にまつわる歴史を
楽しみながら学ぶ

井の頭恩賜 公園の歴史（後編）

武蔵野市民の憩いの場である

「井の頭恩賜公園」は

5月に開園100周年を迎えました。

これを記念し、春・夏号の2回にわたり、その歴史と文化をたどっています。



昭和25（1950）年、移動動物園でやってきたはな子
（提供：井の頭自然文化園）

昭和16（1941）年に始まった太平洋戦争は、井の頭恩賜公園の歴史にも暗い影を落とします。

開戦の翌年には井の頭自然文化園が開園しますが、武蔵野地域が繰り返し空襲を受けるようになると、事実上の休園状態となってしまいました。

また、昭和19（1944）年には、空襲で亡くなった人々のひつぎを作るために、約4ヘクタールの杉の木が伐採されました。井の頭公園を特徴づける風景が大きな変化を見せたのは、戦争の影響だったのです。

そして昭和20（1945）年、ようやく終戦を迎えると、井の頭公園の新たな歩みが始まります。

戦後復興期の「食糧増産」から 高度経済成長期へ

井の頭公園の戦後復興は、「食糧の増産」から始まりました。園内の空き地はほとんどが畑となり、自然文化園で飼育する動物のエサとして、麦やジャガイモ、サツマイモ、トウモロコシなどの穀物や野菜が植えられたのです。

それでも、戦後間もないこの時期は、人々が娯楽に飢えていたこともあり、同園は身近なレクリエーショ

ン施設として急速に復興していききました。終戦の翌年である昭和21（1946）年に、すでに22万5000人だった有料入園者数は、昭和25（1950）年には36万5000人、昭和28（1953）年には50万5000人と、年々増加の一途をたどります。

この時期、のちに井の頭自然文化園のシンボルとなる動物がやってきました。アジアゾウの「はな子」です。昭和24（1949）年にタイから贈られたはな子は、当初、上野動物園で飼育されていましたが、移動動物園で3度、井の頭へやってきました。この出会いをきっかけに、子どもたちから「はな子を井の頭に」という要望が強まり、昭和29（1954）年、新設されたゾウ舎に、はな子を迎えることになりました。はな子7歳のときでした。

時代の変化とともに変わる 市民と公園との「つきあい方」

食糧難と混乱の時期を切り抜け、人々の暮らしが少しずつ余裕を取り戻し始めると、井の頭公園では、地元劇団によるシェイクスピア劇、ボクシングの試合、納涼花火大会、「ミ

ス井の頭コンテスト」など、戦後の開放感を謳歌するような、数々のイベントが開催されました。

中でも、花火大会とミスコンテストは、夏の一大イベントでした。花火大会は昭和26（1951）年から昭和33（1958）年までの8年間にわたって行われ、観覧に訪れた人々は、池の水面にすき間なくボートを並べ、竹竿で固定した水上観覧席で花火を見上げました。

ミスコンテストは昭和28（1953）年から昭和30（1955）年までの3年間にわたって開催されました。当時の新聞記事によると、ミス井の頭コンテストで選ばれた「ミス」と「準ミス」は、オープンカーに乗って吉祥寺、三鷹、武蔵境の各駅前商店街を華やかにパレード。沿道には多くの市民が集まったそうです。

1970年代に入ると、周辺の用地買収によって、井の頭公園の拡張と施設整備が進みました。

井の頭公園に「西園」が開園したのは昭和49（1974）年のこと。西園は、もともと「日産厚生園」として使われていた土地の一部を東京都が買い入れ、井の頭公園に組み込んで追加開園したものです。昭和59



昭和31（1956）年、花火大会の水上観覧席



昭和29（1954）年、「ミス井の頭」によるパレード（提供：土屋恂氏）



（1984）年には、公園周辺の住民に半世紀にわたって親しまれてきた弁天堂近くのプールも、このエリアに移されました（このプールはその後、利用者の減少に伴い、平成14年度末に廃止され、平成23年度に撤去されました）。

平成3（1991）年度には、「井の頭恩賜公園についての再生基本計画調査」に基づいて、西園区域は「文化の森ゾーン・グリーンフィットネスゾーン」として位置付けられました。西園には400メートルトラック、テニスコートなどが整備され、市民の健康づくりに役立っています。

開園100周年 そして未来へ

周辺の都市化が進み、武蔵野の風景が失われてきた中でも、井の頭公園は豊かな森と水の残る貴重な空間として人々に親しまれてきました。

そこで、後世にもこの豊かな自然環境を残すことを目的に、地域と連携して井の頭公園のあり方を考え、行動するため、関係団体や行政による「井の頭恩賜公園100年実行委員会」が平成18（2006）年7月に設立されました。同委員会は、井の

頭公園の開園100周年に向けて、主に「水と緑の再生」と「公園を核とする街のにぎわい創出」を柱とした事業を展開してきました。

「水と緑の再生」では、井の頭池を本来の生き物がすめるきれいな池に戻し、サクラや雑木林が健康な状態で永続できるよう、さまざまな取り組みを進めています。外来生物の駆除や水草の再生などを目的として、井の頭池の水を抜き、1カ月ほど干して、底にたまった泥の中に含まれる窒素分を大気に放出することで、水質の改善をしたり、池岸や水路の点検修理を行ったりする「かいぼり」も、こうした取り組みの一つです。

一方、「公園を核とする街のにぎわい創出」の代表的な取り組みが、平成19（2007）年1月にスタートした「アートマーケット」です。

それまで、井の頭公園では、週末や休日になると露店や大道芸、弾き語りなどのパフォーマンスが集まり、井の頭公園の魅力の一つとして知られていましたが、その一方で、騒音や、通行の妨げになるなどの苦情も寄せられるようになりました。また、都立公園では本来、無許可の営業行為は禁止されているため、「公

園管理の適正化」という観点からも、解決を図る必要がありました。

そこで「100年実行委員会」では、手づくりの作品やパフォーマンスの出版を行う人に、あらかじめ出展者登録をしてもらったうえでスペースを提供し、公園を訪れる人々との交流を深めてもらうと、アートマーケットを企画したので。公園の適正管理と、アートの発信地としての公園の魅力アップを両立させた、このユニークなアイデアは話題を呼び、全国的に注目されています。

そして平成29年5月1日、井の頭公園の西園競技場で「開園100周年記念式典および記念コンサート」が、にぎやかに開催されました。邑上守正市長は「市民だけでなく、国内外に通じる公園になってきたのではないのでしょうか。住みたい街吉祥寺には公園が不可欠。みんなで大切にしていきたい」と挨拶しました。

大正6（1917）年の開園から100年——井の頭恩賜公園は、人々の暮らしの変化とともに、その姿を少しずつ変えながら現在に至っています。私たちは、次の100年に向かって、どんな物語を紡いでいくのでしょうか？